『ベンヤミン・アンソロジー』

山口裕之編訳

河出書房新社　二〇一一年

ヴァルター・ベンヤミンは、恐らく日本で最もよく知られ、読まれているドイツの著述家の一人ではないだろうか。「批評家」あるいは「思想家」といったイメージのしやすい言葉ではなく、「著述家」といういささか歯切れの悪い肩書を彼に与えたのは他でもない、ベンヤミンほどその全体像をつかみ難い作家も少ないからだ。ゲーテの『親和力』やドイツバロック演劇、ボードレールを論じた文芸批評家であり、現代の翻訳論やメディア論の中で必ずと言ってよいほど引用される思想家でもある。また、優れたエッセイストとして、『ベルリンの幼年時代』のような独特の自伝的テクストも残している。しかも、それらの論文やエッセイのどれもが、単一のジャンルには還元できない複雑な性格を持っている。例えば、ベンヤミンの『親和力』論はゲーテの一作品を論じた二次文献なのか、それともベンヤミン自身の思想を展開した一次テクストなのだろうか。私自身、学生時代に『ドイツ悲劇の根源』を読んで以来、その謎めいた文体も相まって、ベンヤミンのテクストに「とっつきにくい」という印象を持っており、実は今でもこの印象はあまり変わっていない。

本書は、論文及びエッセイ形式で書かれた、ベンヤミンの比較的短く、かつ重要なテクストを集め、かくも複雑なこの作家のエッセンスを抽出しようと試みている。選ばれたテクストはそれぞれ個別の対象を扱ったものであり、その配列も執筆年代順になっていて、一見したところ本書には「特別な構成はない」ように見える。しかし、訳者自身も指摘しているように、本書に収録されたテクストからはいくつかの共通するテーマが浮かび上がってくる。いわく、「言語」と「メディア」、そしてユダヤ教神学の時間・歴史概念を背景とする「救済の概念」である。訳者は、「これらの主題がベンヤミンの思考のなかで特別な軸を形成するものである以上、このアンソロジーにそれらの軸が表れるのは自明のことかもしれない」と述べ、本書の「内的構成」が各テクストの集合から自然に成立したものであるかのような感じを読者に抱かせる。しかし、実際には、この「内的構成」は訳者の周到なテクスト編集によって生み出されたものである。

すなわち、「救済」のイメージを裏付けとする特異な言語観を展開した初期のエッセイ「言語一般について」を冒頭に置き、このテクストで早くもその端緒が示されたベンヤミン独自の神学的思考の終着点ともいえる最晩年のテクスト「歴史の概念について」を巻末に配することで、ベンヤミンの思想の基軸（それは同時にアンソロジーのテクスト配列を支える縦軸でもあるが）が提示される。そして、両テクストに挟む形で、それぞれ独立したテーマを扱いつつも、その奥底にあの神学的「救済」のモチーフがいわば通奏低音のように鳴り響く八篇のテクストが収録されている。このように考え抜かれたテクスト構成により、さまざまな論点をある問題系に沿ってだんだんとず

らしながら展開させてゆくというベンヤミン特有の思考の形が、彼の全著作活動の根底にも横たわっていることが明らかにされている。本書は、ベンヤミンの思考過程を本全体を通じて体感できるようにしている点で、ベンヤミンの著作に初めて触れる読者でも「手に取りやすい」アンソロジーを編むという訳者の意図が十分に反映された好著であるといえよう。

最後に新訳の意義について一言付け加えておきたい。言うまでもなくベンヤミンの代表作にはすでに複数の日本語訳が存在する。本アンソロジーでは（先行する翻訳との違いを打ち出すと同時に、それらへの批判も込められているのであろうが）、いくつかのキーワードに、これまで日本のベンヤミン読者に親しまれてきた定訳とは異なる訳語を当てている。その最たる例として、複製技術論の中核をなすAuraなる概念に定訳の「アウラ」ではなく「オーラ」という、ある程度は日常的に用いられる（そして現代の日本語ではいささか皮相な使われ方をしている感がなくもない）語を当てていることがあげられる。これについては、ベンヤミンのコアな読者からかなり異議もあるのではないかと思われる。しかし、ベンヤミンの用いているAuraという語は、訳者も解説で指摘しているように、一般的に用いられる語であり、ベンヤミンのテクストにおいても特に（日本語の「アウラ」なる訳語が呼び起こすような）神秘的かつ謎めいた色合いをもたされているわけではない。このように、テクストの内実により沿った新しい訳語を採用することで、本書は、これまでの日本語訳テクストにともすれば見られがちであった、いたずらにベンヤミンを神秘化する傾向を是正できているのではないだろうか。学生時代の読書体験から軽いベンヤミン・アレルギーにかかってしまった私も、新しいベンヤミン像を提示する本アンソロジーに触発され、改めてベンヤミンをまた手に取ってみようかという気にさせられてしまった。

（西岡あかね）